

ダッハウ聖なる血カルメル会修道院

13世紀に認められたカルメル会の原始会則には「昼も夜も主の掟を黙想し、祈りのうちに目覚めていなさい」という生活規則が基本として示されています。観想修道会であるカルメル会の生活における最も重要な役目は祈りといえるでしょう。祈りの生活とは静けさの中で神の前にとどまり、神に耳を傾けること、神との親しさを深めていくことと言ったらいでしょうか。そのためには神と人々の双方に向かい、世の中の悩みや苦しみに対する開かれた心が必要とされます。カルメル会修道女は祈りの中で教会や現代社会の必要を神に捧げ、祈りによる奉仕によって今の時代の不安や苦しみを共にしたいと願っています。共同体の生活は静けさと沈黙の雰囲気にも包まれていて、ミサ聖祭、一日1時間ずつ2回の念禱、共同の教会の祈り、生計のための手仕事、家事、庭仕事、そして皆で集う1時間の休憩時間などが日常生活の重要な部分をなしています。

このカルメル会修道院は1964年に、元の強制収容所の敷地に隣接して創立されました。創立者であるマリア・テレジア院長の意図は、このかつての残虐行為の地を修道女たちの共同生活と祈りの場とし、まさにここに生きている希望のしるしを打ち立てようということでした。人々のため祈りの中で神に向かうというカルメル会の本質的な使命は、この場所においては特にキリストによる許し合いに奉仕し、過去と現在の苦しみを共に担おうとする務めになるでしょう。そのために私たちは人々が祈りを求めて私たちに託すさまざまな苦しみを理解しようとし、祈りや信仰の体験について語り合う用意があります。希望者は私たちの典礼に参加していただくこともできます。

“私の考えによれば念禱とは、愛されていることがたしかであるからこそしばしば会って話したい、と思うような友である神と一緒に居ることにほかなりません。” アビラの聖テレサ

「ダッハウの聖なる血カルメル会修道院は祈り、黙想、内省の場として建てられました。修道院の建物は隣接する当時のドイツ最初の強制収容所に深くつながっています。その基本は十字架の形であって、縦軸をなすのが収容所の中央道路、横木は修道女たちの修室の並びです。回廊が頭、聖堂と内陣が身体、聖櫃が心臓に当たります。各部屋や仕事場は祭壇を取り巻いて位置しており、全体がまとまった一つの姿になっています。ダッハウのカルメル会は、すべてにおいてシンプルで、建築全体が永遠を思わせるような静けさを求める心に添うようにと構想されています。」
ヨセフ・ヴィーデマン教授（設計者）